
彼について私が話そう

すていっち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼について私が話そう

【コード】

N30820

【作者名】

すていつち

【あらすじ】

死刑執行された彼。いろいろと言われている彼だけど、私の知っている彼は違う。
実話をもとにしたフィクションです。

ある死刑執行人の話

彼は去年の今ごろ亡くなった。

「亡くなった」という言い方はおかしいのかも、しれない。なぜなら彼は殺人の罪で死刑になったのだから。

少し前は、死刑判決が出ると家族以外は面会も連絡もとれなかったが、最近になって、面会もできるように変わったらしく、彼から連絡をもらった私は、死刑判決後の彼に面会に行った。

前回、面会に行ってから8年近くが過ぎていた。

久しぶりに行った拘置所は近代化されて、映画に出てきそうなビルになっていた。

受付を済ませ、荷物を預けボディチェックをして中に入ると、薄暗く長い廊下が続いていた。

人はいなくて、ただひたすら廊下。

エレベーターホールにつき、エレベーターに乗るが落ち着かない。

確かかなり高層階まで登った記憶がある。

エレベーターを降りるとそこは明るく、窓もあり高層階だけに見晴らしもある。

目の前に受付。ベンチが並んでいて、個室のドアがいくつが続く。まるで病院のようだ。

番号を呼ばれ、指定された部屋に入り座って待っていると、アクリル板で仕切られた反対側の入り口から、彼と看守が入ってきた。

彼は少し恥ずかしそうな笑顔で、いつものように世間話をする。

私も彼も、これが最後だとわかっている。

ふと彼が「人を殺してから肉が食べられない」と言った。

彼の口から初めて聞く現実。彼の犯した罪。

出会い

彼と私が出会ったのは18年前。彼が23歳のころ。

出会った時の彼の年をはつきりと覚えているのは「伝言ダイアル」で知り合ったから。

その頃は今のようには携帯はなく、出会い系として「テレクラ（テレフォンクラブ）」や「伝言ダイアル」が流行っていた。

「伝言ダイアル」とは、出会い系サイトの掲示板みたいなもので、特定の電話番号へ電話し、自己アピールを入れ、メッセージを待つ、というシステム。

「僕は23歳のM男です。よかつたら連絡下さい。」

そのメッセージに興味を持った私は、メッセージを入れ、新宿西口の「フルーツパーラー高野」の入り口入ってすぐで待ち合わせをした。

約束の時間、彼は現れなかった。

少し待ってみた。

もう、帰ろうと思ったその時、走ってくる彼が見えた。

彼だ、と思った。

歌舞伎町

彼は当時流行のツーブロックカットに黒っぽい服装だった。

彫りが深く「ハーフなのかな」と思った。

初めて会ったのにそんな気がしなくて、待ち合わせをした昼過ぎから夕方5時前までがあっという間だった。

その頃の私は新宿歌舞伎町一丁目にある「ファッションヘルス」で遅番として風俗嬢をしていた。

30分のサービスで5000円の報酬。

5時から12時くらいまでで、1日平均5万円を稼いでいた。

私が風俗に入ったきっかけは、付き合っていた彼氏と遠距離恋愛になり、その旅費を稼ぐため。

風俗経験のある友達に誘われたことから。

結局、その彼氏とはすぐに別れてしまったのだけど、短時間で稼げる魅力に魅せられ、風俗はやめられなくなっていた。

日々

彼には風俗で働いていることを最初に話していたので、気持ちが悪かったこともあったのかもしれない。

彼は代々木上原に住んでいて、恵比寿にあるデザイン専門学校に通っていて、私は恵比寿に住んでいた。

代々木上原は新宿まで小田急線で一本。

私の仕事がおわる頃、待ち合わせをし、西麻布にあるクラブで遊んで私の家に泊まり、学校に行く。

そんな毎日過ごし、1ヶ月くらいたった頃、彼に「ニューヨークに留学する」と打ち明けられた。

実は留学は随分前から決まっていたようだった。

すっかり彼がいることに慣れた私にはショックだったけど、仕方ないこと。

彼はニューヨークに行ってしまった。

ニューヨーク

彼がニューヨークのデザイン学校に留学してしばらくたったころ、旅行に行った。

彼に相談して、当時、できたばかりの話題のデザイナーズホテルを予約。

このホテルは彼の好きな『フィリップ・スタルク』がデザインした
もの。

普通のホテルよりは割高だった。

JFK空港につくと出口には彼と友達がお迎えに来てくれていた。

彼は私を驚かせようと、リムジンを手配してくれていたようだったが、手違いで来ず、タクシーでマンハッタンに向かった。

まずはホテルにチェックインしてから、マンハッタンを散策した。

彼の学校を覗いたり、いつも過ごしているというショッピングモールのフードコートに行ったり、夜はお気に入りのクラブに連れていってもらったり。

クイーンズにある彼の部屋に行ったりして過ごした。

何人かの友達も紹介してもらった。

ほとんどは、留学している友達だったけれど、中にはニューヨークで結婚したという人もいた。

その人は日本人の女性。彼女の夫はチャイニーズ・マフィアだと教えてくれた。彼女の夫に、『スミス&ウエスタン』という銃を撃た

せてもらった・・・と楽しそうに話していた。

あつという間の1週間がすぎ、私が帰るその日に彼は、ビザが切れてもこのままニューヨークに残ることをつけた。
そして私にもニューヨークで暮らさないかと言った。

妊娠と別れ

彼に見送られ、成田行きの飛行機に乗って考えた。彼とニューヨークで暮らすのも面白そうだなと。

それには問題が1つある。

風俗嬢の私だか、親は厳格で、ニューヨークに住むなんて許しても
らえそうもない。

そこでニューヨーク校を併設している、という、美容の専門学校に
入学し、留学を目指すことにした。

離れて暮らす日々。

新しい環境と出会い。

私には新しい彼氏ができた。
でも、彼には言えない。

しばらくそんな状態が続いたある日、1ヶ月以上、生理がきていな
いことに気が付いた。

市販の検査では妊娠を表すラインが浮かび上がった。

病院にいき、中絶の手続きをしてくる。

自宅に戻り、まず、彼に電話をした。

「実は私、妊娠した」

「え、だって俺はできないはず・・・」

そう、彼はイカない人で、私たちのセックスは適当に彼が疲れたら終わる、というものだった。

彼はもともと遅漏だったうえに、薬物を乱用していたのでイカなくなつた、と言っていた。

「だから、あなたじゃない別の人。ごめん。離れてるのは無理みたい。」

彼は静かに「わかつた」とだけつぶやいた。

(後に彼が書いた本の中にこの時の別れについて触れた部分があった。自分が悪かったと。でもそれについてはまた別の機会にしたいと思う。)

それから彼氏に電話をし、妊娠したことと、中絶することを伝えた。

帰国

それから数年たったある日、彼から電話があった。

「実はニューヨークで捕まったが、保釈中なので、今のうちに日本に帰る。着いたらまた、連絡してもいいかな。」

アメリカの裁判のシステムがわからなかったので、なんのことだかよくわからないまま、帰国したら会う約束をした。

待ち合わせは恵比寿。

何年かぶりに現れた彼はショートカットにパーマをかけ、エスニックな服装で何人だかわからない風貌だった。

私と別れた後、チャイニーズ・マフィアに仲間入りし、数々の犯罪を犯したこと。

それで捕まったが、保釈中に仲間が用意してくれた『他人のパスポート』で帰国してきたこと。

イメージを変えるため、白いポロシャツに革靴などでツアー客のように装ったこと。

どんな犯罪かは詳しくは語らないものの、毎日が楽しかったと。

彼はとても紳士的な態度で私には優しい。

けれども彼の話は飛んでいて、本当なのか嘘なのか……。とても興奮して話す彼は、犯罪が自慢のようにも感じられた。

暴力的な犯罪を悪びれない彼が少し怖いなと思った。

転職 ヘルス〜五反田SMクラブ

恵比寿で再会した後、しばらく、連絡を取り合っただけで、会うこともなく疎遠になって行った。

その後、私は引っ越しをして新しい電話番号になり、引っ越しとともに新宿方面の店（新宿、高田馬場、池袋などのヘルス店を転々としていた）をやめ、五反田のSMクラブで働くようになった。

SMクラブというと、かなりハードなイメージがあるかと思うが、ピンからキリまであり、私が働いていたのは『ソフトSM店』で、イメージクラブ（コスプレしてプレイする）のSMごっこみたいな感じのお店だった。

時間は60分から長いと180分以上もあり、60分で1500円オプションに以上もよってプレイ料金もあるらえた。

13

もちろん、嫌な客やマニアな客もいる。

私の指名の客で『スカトロ』好きがいたが、ガラス浣腸器でお湯を浣腸し、その排泄物を弁当箱に入れて持ちかえる。

さらに「今日はわたしの〇〇〇をもらってくれてありがとう。大切に
にしてね。」と手紙をかかされる。

そんなちょっとディープな客もたまにはいるが、たいていはコスプレして、軽く縛ってみて、バイブで遊ぶというパターン。

何度か指名をされるうちに、プレイよりも話をするの方が多くなったりもした。

ヘルスは、のりや勢いで軽く抜いていこうという感じだが、SMはそのためになんざ目指してくるし、プレイ料金プラス、プレイ場所のラブホテルの代金も客が支払うので金額も高い。

客の話やストレスを受け止めるのは重い。

そのうち私はウツになった。

事件

私がウツになりながらも、五反田で働いていた時に事件は起こった。

私が働いていたSMクラブの場所とは、線路を挟んで反対側にあるSMクラブのオーナーが殺害された。

これは話題になり、ニュースやワイドショーにも取り上げられたから覚えている人もいるかもしれない。

その時は「そうなんだ、怖いね」くらいにしか思っていなかったが、その後、しばらくしてテレビを見ていた時に、速報として、テロップに流れてきた彼の名前を見たときは心臓がとまるかと思った。

文通

ニュース速報を見てから、彼の事件のニュースを見て、ワイドショーを見て、図書館に行き、過去の新聞をあさり、事件について調べた。

ウツになっていた私は「風俗の仕事を含め、相談できるのは彼しかない」と、思った。彼と連絡を取りたいと。

小菅拘置所に連絡し、面会の方法や手紙を出すための住所を聞いた。久しぶりに書く手紙、しかも特殊な状況。

「テレビで事件のことを知りました。久しぶりです。私は今、五反田のクラブにいます。こんなに近くにいたことに驚きました。」
そんなとりとめのない内容だったと思う。

しばらくすると、桜のスタンプマークがついた彼からの返事がきた。封筒にも便箋一枚一枚にも桜のスタンプマークが付いている。

これは手紙を検閲して許可がおりた、というしるし。
彼からも「元気ですか？突然の手紙に驚きました。」そんな何気ない内容だった。

それから彼と私の文通が始まった。

「拘置所はすきま風があつて寒い。軽くて暖かいフリースが着てみたい。（当時、フリースが出始めた頃だった）」

「毎日、本を読んでいる。」

「体を鍛えるために腕立て伏せや腹筋をしている。」

何度かやりとりをしたあと、面会に行きたいことを伝えた。

「拘置所の面会は1日に1人とされているから、面会に来るならば後から来る人に悪いから日を決めてくれると助かる。」

日を決めて面会に行った。

東京拘置所

地下鉄日比谷線直通の電車に乗り、小菅駅で降りる。

改札を出て右、すぐの大きな通りを左に進む。

上には高速が走り、道の先には河川敷の土手が見える。

歩く人がほとんどいない道。

横を通るのは大型のトラックばかり。

5、6分歩くと拘置所のレンガの壁が見えて来た。

面会の入り口は壁つたいに左に曲がり、さらに3分ほど歩いた突き当たり。

壁の反対側には民家が広がる。

面会入り口近くに『差し入れ屋』なる商店がある。

右翼の装甲車、そのメンバーと思われる人たちが数名集まっていた。

古びた門を入るとすぐに仮設のような受付待ち合い室があり、そこで用紙を記入し番号を呼ばれるまで待つ。

用紙には面会希望相手の名前と、自分の名前や住所、電話番号、相手との関係を書く欄がある。

用紙を記入して、受付に渡すと私の顔を見て用紙をチェックし、番号札が渡される。

番号が呼ばれるまでの間、重い空気に緊張する。
落ち着かない。

やっと番号が呼ばれ、本館に向かう。

本館では手荷物検査を受け、携帯などはロッカーに入れるよう支持をうける。

セキュリティゲートをくぐって渡り廊下を渡ると、田舎の駅か、分校のような古びた待ち合い室が。

その一角には、差し入れの受付があり、そこで差し入れの手続きをする。

駅のベンチのような木製の椅子に座り、さらに番号が呼ばれるのを待つ。

何番は何号室・・・と放送が入る。

木の廊下を歩き、番号のついたドアの真鍮のノブを回し中に入ると、アクリル板で仕切られた部屋に椅子が2つ。

1つに座り待つ。

アクリル板の向こう側のドアの前で止まる足音。
ドアが開いた。

面会

看守とともに彼が入ってきた。

五分ガリの頭にジャージ姿、シンプルなメガネをかけた姿の彼が一瞬誰だかわからなかった。

でも、私の正面の亚克力板ごしに座り

「久しぶり」

と恥ずかしそうに笑った顔は昔のままだった。

彼の左隣の一段高い席に看守が座り、ノートに何かを書き込んでいる。

看守は私の方を見たりはしないが、明らかに耳はこちらに向いているようだった。

そんな中での会話。

世間話や思い出話。

五分たったかたまたなかつたか・・・看守が

「そろそろ」

と彼につぶやいた。

彼は

「はい」

と応え

「行くね。ありがとう。」

と、告げ、席を立ちイスを片付け、振り替えることなく、看守とともに部屋を出ていった。

私は一人、イスに座ったままいた。

初めての体験に緊張し、ただただ呆然としてしまった。

手紙や会話さえも監視される・・・自由のない生活。

罪を犯した罰。

傍聴と判決

その後、何度となく文通し、幾度か面会をした。

文通をしていくうちに、彼が哲学にはまっていたことを知る。

彼自身、ある作家と手紙のやりとりという形で、哲学の本を出している。

しばらくの間、手紙の内容が哲学の話ばかりになり、だんだん彼が、私の知らない彼になっていく気がした。

何年かたつうちに、私は結婚し妊娠、出産をした。

その間も、前よりは頻度は減ったものの、文通は続いていた。

彼は原稿料や印税が入ると私に現金書留で送ってきて「自分が殺してしまった被害者の人たちの名前でユニセフに寄付してほしい」と頼むのだった。

何度か私は手続きをして、領収書を返送した。

裁判に出向いたこともある。

彼の判決がおける日には長蛇の列ができ、傍聴は抽選になっていた。

私は抽選にはずれ、判決の日は傍聴できなかった。

そして死刑の判決。

上告することはしない・・・と罪を受け入れる彼だったが、死刑確定後は親族のみしか連絡をとれないということで、執筆中の本が半端になることもあり、説得されて上告した。

夢で

もうなにもかも
ぶちまけよう。

死刑囚とはどんな人ですか？
どうすれば極悪でしょうか？

彼は死刑確定後『雪の女王』というえすSMクラブを舞台とした小説を書いていた。

そのモデルが私だからと伝えてきた。

そして気に入らない箇所がないかと原稿を閲覧させてくれた。

その原稿を返送した直後に、彼の死刑執行された。

その夜、
夢を見た。

彼と私は二人きり。

お互いに見つめあい、
『そうなんだね』
と、その時を悟った。

彼と私は
きつく抱きしめあった。

お互いに

最期だと
思った。

お別れ

彼の刑が執行されたことをニュースで知った。

実に何年かぶりの死刑執行だったらしい。

しばらくの間、死刑について論議がされたように思う。

死刑判決を受けた彼。

死刑執行された彼。

死刑囚として10年近く過ごした彼。

私にはよくわからない。

どこで間違いを犯してしまったのか。

何が彼をそうさせたのか。

ただ、彼は彼だった。

今でも彼の恥ずかしそうな笑顔を思い出す。

彼の遺作となるあの原稿はどこに行ったのだろう。

それがとても気がかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3082o/>

彼について私が話そう

2010年11月4日13時34分発行